

3 学期始業式に

校長 中村 訓子

年明けから大きな災害や事故が続く中で、まずは、みなさんとうこうして新学期を迎えることができたことに感謝したいと思います。

この3学期は、次の年度にどれだけ飛躍ができるかがかかっている学期です。2学期の終わりに、自分だけでなく、自分を含む集団が、応援したい、また会いたいと思ってもらえるよう、考えて行動してほしいという話をしました。まずは、それを実践する自分であり、集団であるよう磨きをかけてください。

そして、2024年のスタートに当たり、今年、自分はどんな自分でありたいか、どんな自分になりたいかについて具体的なイメージを持ってください。たとえば4月、桜吹雪の中で、自分は新年度をどんなふうを迎えていたい。漠然とではなく、「具体的に」イメージしてください。イメージができなければ、自分なりの覚悟をもって、何か一つ自分がこうありたいという目標を定めてください。それができれば自ずと自分が今、すべきこと、考えるべきことが見えてくるはず。です。

年の初めから日常が消えてしまう大きな出来事が続きました。そんな年を生きていく私たちだからこそ、当たり前の日常の「当たり前」を大切に丁寧に生きること、心に傾けていきたいものです。そして、今自分にできることは何かを自分に問い続け、それを形にしてください。形にできる力をつけてください。

この一年の学びが、自分を変える学びになっているか。これまで気づかなかつたことに気がつき、見えなかったものが見えるようになってきているか。前よりも広く、深く物事を考えることができるようになってきているか。自分のため、誰かのために行動する力がついてきたか。3か月後、胸を張って「YES」と答えられるような学期にしてください。

4月、爛漫と咲き誇る桜の花の色は厳寒のこの時期の木や幹からしか取り出すことができないのだそうです。それは花を咲かせるために桜という木が営々と自分の中に色をため、春に向けての準備をしているから。人の目には見えないけれど、厳しい冬の寒さの中で、粛々と春に向かって力をためて、花という形でそのパワーを開花させる。その営みは毎年毎年変わることはありません。それが桜の当たり前。その当たりに桜は木の命を懸けています。季節の巡りの中で、その時その時になすべきことに全力を傾けることがその木をその木たらしめている。人間も同じです。なすべきことにきちんと向き合い、その時々にするべき当たり前を、ゆるがせにせず行っていく。そうして初めて次のステージで力が発揮できるのです。

巡ってくる春、桜の花とともに、皆さんがそれぞれにためてきた力を開花させ、パワーにあふれる皆美が丘女子高等学校にしてくれることを期待しています。

令和6年1月9日